■研究十二月往来〈193〉

〈丁固松〉小考

石井倫子

祝融の玉松明神に参詣した丁固が、一人の老人から十八歳で三公の位につくであろうと告げられ、やがて梅花の神と玉松の神から暦と神璽を授かり祝福を受けるというあらすじの番外曲〈丁固松〉は、最古写本が観世文庫金春禅鳳自筆巻子本（末尾の継紙に「今春せんほう自筆自章」の識語あり）であることから、永正十年頃までには成立していたことが確実視されるが、伝本は少なく、番外曲の中でも比較的遠い曲に属するものである。

この能の典拠は、次に掲げる『蒙求』の「丁固生松」であると考えられる。

初固為二尚書一、夢三松樹生二其腹上一、謂レ人曰、松字十八公也。後十八歳、吾其為レ公平。卒如レ夢焉。

腹の上に松が生える夢を見た丁固が、松という文字は十八公と書くから、十八年後に自分は公の位に就くであろうと自ら夢解きをし、果たしてその通りとなったという故事にヒントを得ていることから連想されるのは、自分が買った「安」という文字が冠に女と書くことから、冠と鉾で武装した男の正体が自分の妻であることに気付くという番外曲〈安の字〉（初出は『舞芸六輪』）である。もちろん、〈自然居士〉でも「船の曲舞」で「しかればふねの舩の字を公に舟むと書きたり」と舟の字源が説かれはするが、先の二つは共に、析字（＝字解き）の趣向をそのまま筋立ての中に取り込んでいる点で、言葉遊戯の謎々が流行した室町後期の風潮を反映した作品だといえるだろう。

〈丁固松〉の構成は次の通りになっている（禅鳳自筆巻子本を底本とし、適宜他本を参照。なお詞章の引用に際しては、読みやすいよう表記を改めた）。

①［次第］［名ノリ］「上ゲ哥」　ワキ・子方登場。丁固とその臣下一行が、祝融山の玉松明神に参詣する。

②［一セイ］［下ゲ哥］　前シテ登場。祝融に済む老人が、霊夢の告げを奏聞するために一行のもとを訪れる。

③［問答］［上ゲ哥］　シテ・ワキ応対。老人は丁固が十八歳の時、三公の位に就くであろうと告げる。

④［クリ］［サシ］［クセ］　シテの物語。松と梅のめでたい謂われ。

⑤［ロンギ］　前シテの中入。老人は自分こそ祝融の松の精だと正体を明かし、折から吹いてきた松風の中に姿を消す。

⑥間狂言による立チシャベリ（天理図書館蔵番外謡本集・鴻山文庫蔵観世流五百番謡本による）

⑦【出端】［名ノリグリ］［ノリ地］【天女ノ舞】［ワカ］［ノリ地］　後ツレ登場。梅花の神が現れて舞を舞い、丁固に梅花の暦を授ける。

⑧【早笛】［ノリ地］【舞働】　後シテ登場。玉松の神の舞働。

⑨［ノリ地］　結末。玉松の神は神璽を授け、丁固の治世を千秋万歳と言祝ぎ、祝融山へと再び姿を消す。

［クリ］それ松といへる文字十八公と書きければ、君十八の御歳、三公の位にならせ給ふべき、奇瑞をかねて見すとかや。

［サシ］大極未分のそのかみより、三かうこしやう（三皇五帝カ）の道広く、春夏秋冬天（末カ）長く、社稷の徳のまつりごと。時を遠へず今日までも、

元亨利貞の久しさよ。

［クセ］しかるに松梅の、和光の誓ひ浅からぬ、幾春秋をふる雪の、内にも梅や開くらむ。春の初めの、廿四花の紅。霜の後の、松花の緑迄も、甲乙ひやうちやう（丙丁カ）の、しかん（支干カ）の暦ならずや。四季蔵節の其はじめ、日数も今はあら玉の、年立ちかへる朝夕の、松には丹頂の鶴住み、梅には金谷に鶯宿る　匂ひの声満ちて、四海波静かなる　太平の御代や此君の、国土豊のまつりごと、幾久しさも限りなし。

（第四段）

前場の短い［クリ］［サシ］［クセ］で松と梅のめでたい謂われを語り、後場で梅花の神と玉松の神が影向するという構想は、世阿弥作の神能〈老松〉を思い起こさせる。現在でこそ後ツレ紅梅殿が登場する演出は「紅梅殿」という小書になっているが、次の記事にある通り、本来〈老松〉では紅梅殿を出すのが常であった。

昔は紅梅殿を出し、脇の上座に腰をかけさせ、それをみて、「いかに紅梅殿」と謡ひかくる。常の舞の所にて紅梅殿舞をまふ。其時大夫は橋掛に腰をかけてゐる也。「梢は若木の花の袖」と云ふ所にて働く。文「是は老木の」と云ふ所にても働く。紅梅殿の舞は破の舞なり。

（下間少進『童舞抄』）

〈丁固松〉を見せ場の多い風流的神能として仕立てるに際し、作者は〈老松〉からヒントを得て、本説では一切言及されていない梅を「梅花の神」という出物として登場させたのであろう。

さらにいえば、夢の告げを奏上する前シテの老人、男女二体の出物による捧げ物・舞事という構成は、青鳥が宮中を飛び回るのは西王母来現の予兆であると前シテの老人が奏聞し、後場では東方朔と西王母が相舞を舞う風流能〈東方朔〉に酷似している。〈丁固松〉の最古写本が禅鳳自筆本であることなどを考え併せると、速断は避けねばならないが、この能が禅鳳の作である可能性はかなり高い。

ところで一つ注意したいのが、［クリ］の「君十八の御歳、三公の位にならせ給ふべき」という詞章である。丁固が十八年後に三公になったという本説が、ここでは「十八歳の御歳」と改変されている。これをどのように考えるべきか。

世阿弥の神能〈弓八幡〉が「当御代のはじめのために書きたる能」（『申楽談儀』）、すなわち家督相続した将軍義持を祝福するために作られた能であることはよく知られているが、それと同様の事情を想定するならば、〈丁固松〉はまだ年若い将軍を丁固になぞらえ、その治世を祝福するために作られた能だということになる。

幼少の将軍ということでまず思い浮かぶのは九代の足利義尚だが、ここで祝福の対象とされている将軍としては、明応二（一四九三）年、明応の政変で義稙の対抗馬として細川政元・越智家栄・古市澄胤らに擁立され、翌三年十二月に十四歳の若さで将軍職を継承した十一代の義澄が想定できる。だが結局、政元の傀儡として利用されたにすぎなかった義澄は、永正四（一五〇七）年六月の政元暗殺による幕政の混乱に乗じて翌五年に義稙が再入洛すると、近江に逃亡し、その三年後には近江九里城で病死するという悲劇的な運命をたどったのであった。〈丁固松〉の上演が比較的早くから途絶えてしまったらしい理由も、若い将軍をとりまくこのような政治的状況を考えると容易に納得できるのではないか。

（共立女子短期大学非常勤講師）